

聴潮閣 高橋記念館

聴潮閣 高橋記念館（1）

泉都・別府の繁栄を今に伝える昭和4年の日本建築
現代別府の再生に必要な“古き良き時代”のエッセンスを発信

2004年10月31日

○施設概要

所在地：大分県別府市青山町9-45

電話：0977-22-0008

開館時間：AM10:00～PM6:00（入館はPM5:30
まで）

休館日：毎週水曜日（祝日の場合は翌日）

入館料：大人600円 小中学生500円（いずれも飲み物付き）

URL <http://www.chohchokaku.jp/>



「聴潮閣 高橋記念館」（ちょうちょうかく たかはしきねんかん）は、温泉都市・大分県別府市が最大のにぎわいを見せていた1929年（昭和4年）に、同市浜脇に当時の別府政財界で第一人者だった高橋欽哉氏の住居兼迎賓館として建てられた。

海岸近くにあり、潮の音を聴くという意味から「聴潮閣」と名付けられたのである。

大正から昭和初期にかけて、別府には公共施設や学術施設、温泉施設、全国の財界人の別荘や私邸等、保養地（今ではリゾート地というべきか）でありながら数多くの名建築が登場した。その中でも聴潮閣は、台湾ヒノキをふんだんに使った木造2階建・入母屋造りによる日本建築の粋を極めた建物として、まさに繁栄別府の象徴でもあった。



歴史と風格を感じる、聴潮閣の門

○空襲の被害を受けなかった別府

別府市は、第二次世界大戦での空襲を免れたこともあり、戦前からの伝統的な佇まいが保全されてきた。しかし、次第に建築の老朽化、温泉地としてのポテンシャルダウン、行政の大都市志向のような要因が重なり、景観的・構造的に全国どこにでもある、“普通の都市”に変貌している。

観光や温泉を目的に別府を訪れた経験のある方ならご理解いただけると思うのだが、現代の別府において、温泉地の繁栄と伝統を確認するには事前の情報収集と優秀なガイドが必要…つまり、駅を降りたらあるいはバスを降りたらそこに風情ある温泉宿が並んでいるような環境にはない。人口14万人の中規模都市の中に、温泉地が散在する環境にある。新幹線のホームからの景観がほとんど宿泊施設という熱海とは大きく異なる。

つまり全体景観としての温泉町性はきわめて希薄なのである。だから、自分にお気に入りとなる温泉（宿）を、市内のあらゆる温泉地から探し出す楽しみを含めての旅になるのである。行動手段としてマイカー利用が圧倒するのもうなづけよう。

○観光客の入込は現状維持、対して近隣の湯布院は右肩上がり

別府市役所によれば、同市への入込観光客数は約1,200万人（平成12年）、このうち日帰りが約780万人、宿泊が約405万人といった割合である。平成7年以降、このボリュームに大きな変化はない。

発地別では県内が25%、福岡県が24%（同年）で、県内と九州だけで約62%を占めている。そして、手段としてはマイカーが77%を占め、増加基調にある。総じて、別府観光のお客様は「県内および九州特に最大人口集積の福岡県」で成立する構造が把握できる。となれば、競合は昨今温泉地としての名声を博している近隣の湯布院、阿蘇方面にある。この統計では観光目的が分からないので想定になってしまうが、こと温浴ブームが続く限り、別府は高速道路によって利便な県内・福岡からの集客を、他の有力温泉地と競う構造が続くことになる。

では地理的に最大の競合との位置づけが可能となる湯布院町の観光客動向を見ると、約300万人（平成10年）で、宿泊客が約89万人だが、1970年以降この数字はずっと右肩上がりとなっている。現状維持の別府、伸び盛りの湯布院という差異がわかる。

黒川温泉がブレイクした阿蘇地域12町村の総観光客数は約1,586万人（平成13年）で、こちらも1980年代以降ずっと伸長傾向にある（http://www.pref.kumamoto.jp/statistics/kaiseki/H14kurashi/09_1kanko_5.htm）。熊本日々新聞の報道によれば、首都圏と近畿圏の女性を対象に実施した「九州の観光地アンケート」で、「阿蘇」の認知度は約80%、中でも黒川温泉（南小国町）は九州・山口の「行ってみてよかった観光地」ランキング（リクルート九州支社）で6年連続一位だという。

次へ

聴潮閣 高橋記念館

聴潮閣 高橋記念館 (2)

○別府の観光名所の行き詰まりと新生

別府市における「地域資源をテーマとする空間」ならば温泉を素材とする空間を取り上げるべきかもしれない。実は筆者は別府市の隣・大分市に生まれ高校までを過ごした。だから別府については（1970年代までだが）ある程度の認識はある。当時、わざわざ大分駅まで行かなくても、自宅の近くの「春日浦」電停から“別大電車”と呼んでいた大分交通別大線の路面電車で、そのまま別府の町まで行くことができた。

大分市と別府市の間は今もシーサイドルートである。路面電車ながら国道10号の海沿い区間になると、国鉄の線路と寄り添うように道路端の専用軌道进行を走る。猿で有名な高崎山を左に、やがて別府の町に入ると、電車は国道の真ん中にルートを変えて路面電車らしくゴーストストップを繰り返す。ラッシュ時には、別府市内だけを運行するダイヤも組まれていたのである。

窓から見る別府の風景というのは、港あり温泉の湯煙あり、木造3階建ての住宅ありと、今でいうレトロな雰囲気には溢れていた。その後、電車は別府の西の端にあたる「亀川」が終点となるのだが、このあたりは別府競輪場があり（現存）、親が競輪選手という友人もいた。

地元の子供にとって、別府の山側にある「ケーブルラクテンチ」は、現代のTDLに匹敵するテーマパークであった。初めての大型ほ乳動物、初めての本格的な遊具体験。地元っ子なら、子供時代のアルバムを探せば、必ずラクテンチでラクダに乗って悦に入っている子供時代の自分を見つけられるだろう。それともうひとつ、「杉の井ホテル」がある。ここに併設される「スギノイパレス」（現在は温泉施設となっているが、当時は温泉プールだったように記憶する）もまた、地区の子供会バス旅行の定番だった。

○成功と繁栄体験がイノベーションを阻害

昭和40年代（1960～1970年代）までの別府は、高度成長による温泉観光の繁栄によって、多くの富を得たのだろう。その成功経験が仇となって、1980年代の海外志向の定着、1990年以降の長期不況、さらに高速道路網の整備による地域間競争の激化等に対する変革を遅らせることになる。ラクテンチは破綻の危機を迎えて、筆者のような体験を持つ多くの人々の署名とスポンサーの登場により閉園を免れ、新装「ケーブルラクテンチ」として命脈を保った。同様に杉の井ホテルもレジャー施設経営大手の加森観光のスポンサードによって閉鎖の危機を脱した。このように、戦後の別府を象徴する集客空間の行き詰まりは、別府そのものの観光都市としての限界を意識させる結果にもなったのである。

1972年にこの電車が撤去され、拡幅の進んだ国道10号の沿道から、あの独自の景観は失われ、日本のどこにでもあるロードサイドとなった。当時、大分県で最も高い建築物、別府の繁栄のシンボルのように見えた別府タワーは、周辺にビルが建ち並んだこと、そして巨大建築を見慣れた現代人にとっては、特段の驚きもない。片道3～4車線化された国道10号を走らせると、あっと言う間に別府の市内を通りすぎてしまう。



門の前の駐車場

○埋め立てによる「うみたまご」を核とするウォーターフロント開発

別府市と大分市の間は、別府湾に沿うシーサイドルートだったが、現代は大分市側で沖合の埋立が進行しており、車窓からの海はだんだん遠くになりつつある。かつて、このルート最大の難所で、台風によるがけ崩れでちょうど下を走っていた路面電車が埋まり、犠牲者を出してからは防護網

等が取り付けられていた「仏崎」も、いまでは「仏崎跡」である。そういえば、この路面電車（大分交通別大線）を廃止する理由として、大分県から国道を拡幅するには単線の電車線を利用するしか方法がないと説明されていたように記憶する。なかでも仏崎周辺では、海中に向かって陸地が急峻かつ深く落ちているので埋立は不可能で、さりとして陸側も急峻で道路用地に乏しく、どうしても道路拡幅には電車路線以外にないという理由だったように思う。路線廃止から30年の時間経過は、そのような悪条件でも陸地化できる技術革新と、予算獲得を実現する政治力を地元が持ちえたという実証なのである。沖合を埋め立てたルートを使うようになった現在、路線跡を拡幅した旧道は使用されていない。

話は脱線するが、このシーサイドルートには、2つの海水浴場（白木、田ノ浦）があった。その後、侵食によって砂浜を失ったこれらの海水浴場跡はマリンパレスと一体的に埋立・整備されて、2004年1月に大分マリンパレス水族館「うみたまご」を核施設とするウォーターフロント開発が400億円を投資して大詰めを迎えている。大分銀行の経済研究所の試算では、直接はともかく間接合わせて690億円の経済波及効果を示しているが、筆者は懐疑的である。（賢明な読者の皆様には予想のつくことだろうが、理論的な精緻化を図るため、その理由は「うみたまご」の取材と合わせて後日お目にかけることにしたい。）



1971年当時の東別府。大分交通別大線はここから終点亀川駅前まで国道10号の中央を走る併用軌道となる。それにしても空が広い。露天風呂ならばさぞかしリラックスできたことであろう。

写真提供：松原遊士氏

「思い出鉄道探検団」より許諾を得て掲載

次へ

▶ 聴潮閣 高橋記念館

聴潮閣 高橋記念館 (3)

○唯一の有形登録文化財

戦災を免れた都市に共通する行政課題が、モータリゼーションへの対応である。徒歩感覚の都市から、クルマで利便な都市への脱皮である。都市機能の円滑化のために、土地の記憶や建物の景観はいっさい考慮されない、機能偏重の都市計画が策定され、次々と具体化されていった。これは、別府として例外ではないだろう。

その一方で、戦前からの由緒ある建築は高温多湿の九州では特にランニングコストを必要とすること、また所有者（生活者）にとって現代の住宅設備類の導入を前提とするときわめて不便なこと等もあり、時間の経過とともに多数の歴史的な建物がプレハブにあるいはコンクリートのビルに、さらにはマンション、駐車場とその姿を変えてしまったのである。

幸いなことに、それでも往時の別府の興隆を偲ばせる建築が今でもいくつか残っている。この「聴潮閣」をはじめ、[同所のサイト](#)に紹介されているが「中山別荘」、「旧麻生別荘」、「竹瓦温泉」、「浜田温泉」等がある。なかでも建物内部を一般公開しているのは国の「有形登録文化財」に認定されている「聴潮閣」のみである。

○大分の建築文化に大きな足跡を残すパイオニア

正式名「聴潮閣高橋記念館」の現館長・高橋 鶴子（たかはし・はとこ）氏は、「聴潮閣」を建設した高橋欽哉の直系にあたる。現在、大分県湯布院町にある「由布院美術館」の館長職も兼任、「聴潮閣」の一般公開（金・土・日曜・祝日のみ）による情報発信および保存保護を図りながら、別府市に現存する近代化建築遺産を守る運動を行っている。

ちなみに現在の「聴潮閣」は、建設当初の浜脇（はまわき）から別府市役所に近い現在の青山の地に1989年（平成元年）に解体・移設されたもので、一般公開を始めたのは国の有形登録文化財となった2001年（平成13年）4月1日からのことである。

なお、「聴潮閣」を建設した高橋欽哉は、1928年（昭和3年）には浜脇高等温泉を手掛け（浜脇再開発により取り壊される）、1929年（昭和4年）には現在のみずほ銀行大分支店の前身・大分農工銀行の頭取となって、大分市内に現存するみずほ銀行大分支店を計画・建設させた等、建築文化において多数の業績を残している。

○温泉ならではのコミュニケーションを反映した都市空間

妥協を許さない都市の独善的な現代化・近代化はある時点で消化不良を起こし、腫瘍に変わるリスクがある。これに外科的、西洋医学的な処置を施しても完治は望めない。理学的、東洋的な自己再生力の活性化を図ることが最善である。

高橋館長へのインタビューを通じて、別府の資源とは、温泉地らしい千客万来の明るくオープンな生活空間ではないかと感じた。温泉のコミュニケーション＝他人同士・異文化同士が入浴をきっかけに交流を育み、そこで交換される連続的な情報発信が、やがて温泉のあるコミュニティの活性をもたらした。それがマイカー・コンビニのような現代の個人化・個室化に対応した都市への変貌によって、失われていったのである。



お話を伺った館長の高橋 鶴子氏

当時の温泉町らしい生活スタイルを今に伝える家屋や街区等の都市空間に、そもそもの別府がある。それこそ、現在の別府市がまちづくりのスローガンにかかげる「国際観光温泉文化都市」の基盤にすべき資産である。新旧・広狭的なステレオ的空間認識では、いつまでたってもその価値はわからないだろう。古いこと、前時代的なことと、最近コミュニケーション・テーマ（都市表現も含まれる）に使われているレトリックはまったく別物なのだ。

また、地域ブランド競争ともなっている温泉地文化は、さらに間口を世界に広げれば広げるほど、独自性すなわち他にはない別府ならではの資源が評価される。それは温泉が白いかか沸かしていないかの勝負ではない。温泉が地域の活性を呼び定着させてきた結果となる、にぎわいの評価である。

土地の歴史や伝統を否定している都市に文化は存在しない。たとえあってもそれは花火大会である。温泉がにぎわいの基盤となり、そこで醸成される敷居のない伝統的なコミュニケーションのひろがり、都市としての別府を形作ったのではないだろうか。"湯煙の漂う京都の町屋"のような特定のスペースのみならず、都市の全域に温泉地文化が醸成されたのではなかったのか。

次の新しい時代は、こうした温泉資源の意義や歴史認識を再検証しながら、生活者意識と都市のありようを考えた結果とすべきであろう。そこで、温泉による別府発展のひとつの歴史的空間として「聴潮閣高橋記念館」を取り上げたのである。



本館へのエントランス



展示のメインのひとつ、応接室

次へ

聴潮閣 高橋記念館

聴潮閣 高橋記念館（4）

○8ヵ所の温泉地が共同でプロモーション

別府は、後背に鶴見岳・由布岳があり、その山間部から別府湾に向けて広がる平野部に人口が集積する。海側を先程来言及している国道10号とJR日豊本線が南北に走る。町中に浜脇温泉、別府温泉、亀川温泉、山の方に観音寺温泉、堀田温泉、明晩温泉、鉄輪温泉、芝石温泉等の温泉郷が点在する。町中の温泉は地元や近隣からの利用、山の方は「地獄巡り」等の別府観光との一体利用といった違いがある。主にこれら8つの温泉郷を総合して「別府八湯」のネーミングを行い、共同でのイベントやプロモーションを行い、別府温泉観光の活性化を官民で取り組んでいるのが現状である。



展示されている数々の調度品

○現代の象徴・「ビーコンプラザ」「べっぷアリーナ」

「聴潮閣」は、JR九州の日豊本線別府駅から山側に向かって「青山通り」を上ること徒歩十数分の場所にある。周辺にはいかにも山の手といった雰囲気、別府公園の緑と共に、「ビーコンプラザ」のシンボルとなる高さ125m「グローバルタワー」が見えてくる。その100mの位置には、屋根のないスリリングな展望デッキが設置され、そこから別府市街や別府湾が一望できる。この出現で「別府タワー」の遺物化が進んでしまった。「ビーコンプラザ」とは、「大分県立別府コンベンションセンター / 別府市市民ホール」の愛称である。"西日本最大級のコンベンション施設で、空間を大切にした内部は特色ある各会場で構成され、最大約8,000人の大規模イベントから小規模会議まで、あらゆるニーズに対応できる複合施設"である。2003年度の利用状況だが、報道によれば、コンベンションホールの稼働率は15%で前年の半数程度、フィルハーモニアホール・国際会議室・レセプションホールの主要四施設で見れば稼働率74%（2002年度78%）に低迷したという。



風情を感じる「帽子掛け」

さらに「聴潮閣」の前は、2003年（平成15年）に完成したばかりの「べっぷアリーナ」（別府市総合体育館）がある。別府市の説明だと、大分県内で最も広いアリーナで、西日本でも有数の規模を誇り、プロの大会や国体の開催にも対応している現代的なスポーツ施設であり、スポーツイベントの獲得による別府観光再生の起爆剤だという。なるほど、オープンしたばかりのシルバーのエクステリアは盛夏の太陽に照らされてまばゆいばかりである。2008年の第63回大分国体（夏・秋大会）は、別府国体というわけでもないと思うが、県の規模で施設活用を考えた場合、あらゆる機能が集中する県都大分市に隣接した人口十数万人の都市にあつて、市民のための空間整備としては思い切った投資である。周辺整備を含めた整備費用は約44億円、年間に2億2,000万円の経済効果を見込んでいるという。実は既に需要のカニバリゼーションが発生しており、ビーコンプラザとべっぷアリーナそして大分市内の類似施設（「オアシス21」「ビッグアイ」）との集客競争が激化している。特に隣接するビーコンプラザとべっぷアリーナでは、後者の新規オープン効果をもろに前者が受けた状況（コンベンションホールの稼働率ダウン、上記）が認められている。



スタンドグラスがかわいらしい風呂場。手書きの説明に愛がこもっている

なお、控えめな「聴潮閣」が建設されてから1世紀近い時が流れようとしていることを実感する意味において、べっぷアリーナのモダンデザインは極めて妥当な建築といえよう。

次へ

 聴潮閣 高橋記念館

聴潮閣 高橋記念館 (5)

○常設ギャラリー『もう一度昭和初期、別府展』

「聴潮閣」の敷地内には、別館として蔵を復元した「ギャラリー&レトロカフェ屋」がある。1階がアンティークな家具を駆使したレトロ調のカフェ（名物"ちゃっちゃうどん"等食事もできる）、2階がギャラリースペースとして利用されている。高橋館長のこだわりがギャラリーにある。それは、名画・名作を周期的に入れ替えるような（由布院美術館の館長でもあり、目利きでもある）展示は一切行わず、「聴潮閣」のありようにふさわしく、『もう一度昭和初期、別府展』を常設テーマに固定した上で、随時展示を入れ替える運営としている。「聴潮閣に来場されたら必ずギャラリーを見て欲しい。そこで古くよき時代の別府を再認識してもらいたい」という。取材時は、昭和初期の別府の繁栄を証明するエピソード（例えば新婚旅行で別府国際観光港にやってきた米国人ならぬそっくりの人形夫妻の歓迎に集まった多数の市民の様子、現代でいうメイドインUSAキャンペーンイベントのようなものらしい）を集めた写真展を開催していた。

○自然とゆとりに溢れた建物内部

移築された住居兼迎賓館が「本館」の位置づけである。玄関を入ると、左手に受付が設けられている。そこで入館料（大人600円、小中学生500円）を支払う。本館は2階建て、1階ではアールデコ調の応接間に風情が残る。ステンドグラスの窓、大理石の暖炉、調度品等、昭和初期の生活の洋風化が偲ばれる。なお建物内は、節度と常識を守られることを前提に、すべて実際に手に触れたり座ったりが可能である。建物のポテンシャルを十分に体験してもらいたいとの配慮だ。館内は自然の状態で保全するため、空調等の設備はない。夏の冷房は自然の風である（これがよく通る）。筆者はついでに蚊に刺されてしまった。さすが夏の九州の蚊、結構強力である。

2階には客間が中心で、そこから眺める庭や別館の風情、元気な蝉の鳴き声等、ゆったりとした時の流れに身を任せると、当時の日本人の「間」とか「ゆとり」のようなもの、もちろん当時としてもセブな環境だからこそだとは思いますが、リラックスするぞ！という自分の意志でなく、空間そのものが包み込んでくれることで叶うリラックスがうらやましく思えるのである。ちなみに、この2階の客間にござりと寝転がって（失礼）、耳を傾けたい音楽を挙げてみよう。

・交響曲第5番八短調第2楽章（ベートーヴェン）、1970年代までのウィーンフィルの演奏で。

・亡き王女のためのパヴァーヌ（ラベル）。オーケストラ、ピアノ版いずれも可。

限られた時間で建物や構造的な特徴、由緒等までインタビューは叶わなかったが、築後80年になろうという建物で、それも最近までは住居として使われていたにも関わらず、梁、柱類にキズが一切見あらず、部屋の水平が維持されている。天井板、長押等に惜しみなく使用した台湾ヒノキの素材の良さ、そしてしっかりした大工の技術があっ



別館の2階にあるギャラリー。テーブルの上には画集などがさりげなく置かれている



本館には手書きの案内がそこかしこに

てのことであろう。1階の応接間のテーブルに何気なく置かれた落書き帳――来館者が感想を記入する――には、建物のすばらしさはもちろんだが、豊穡な時間体験、あるいは心のリラックス体験等に関する感動の声が続られていた。

なお、一般公開日以外にも同館を体験できる「[聴潮閣倶楽部](#)」がある。誰でも入れるというわけではなく、目的認識の共有や支援意識の有無等が条件である。入会すると割引特典の他「見る会」「聞く会」「する会」等への参加が可能となる。



高橋欽哉夫妻の肖像画

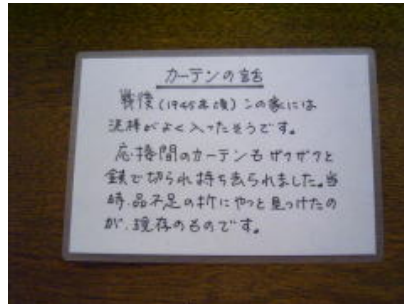
○国際化は不用、もっと足下の日本を見よう

日本は高齢化が確実に進んでいる。そして人口も増加から減少に転じている。現段階では米国型の経済運営への転換によって、貧富の差も拡大している。そのなかで、昭和25年に制定された「別府国際観光温泉文化都市建設法」すなわち現在でも目標化されている「国際温泉文化都市」はどのような具体を示すのだろうか。



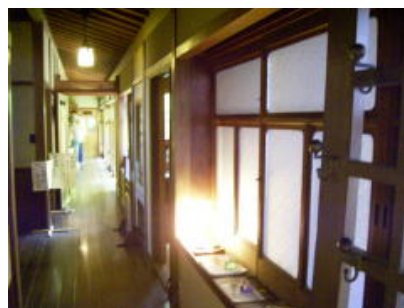
応接間。難を逃れて現存しているカーテンも立派なもの

同条文では、「国際文化の向上を図り、世界恒久平和の理想を達成すると共に、観光温泉資源の開発によって経済復興に寄与するため、別府市を国際観光温泉文化都市として建設することを目的とする」という。もはやそのステップは既に終焉している（まだ公式サイトに掲載されているのも時代錯誤で、いかにその域から脱却していないかの証明になってしまっていないか？）。



盗難に遭ったカーテンのエピソードも手書きでお知らせ

これからの別府は、国際化を目指す必要はないと思う。日本の将来は少子に委ねられ、日本人の多くは歳を重ねていく。国の際を広げるよりも、歳の際を意識しない、どこよりも日本人にとってやさしい町になってほしい。「韓国人観光客の人気・認知のトップが別府で、入込も年々増えているから、今後も同国観光客を積極的に呼び込みたい」というのは、そもそも戦術的だ。利害の生じる事業者にとっての、ターゲットとメリットを明確にしたセールスプロモーションに過ぎない。



懐かしく、暖かい空気が流れているような廊下

戦略認識で考えるなら、誰にとっての別府なのかをまずは位置付けるべきだ。そのターゲットが別府から得られるベネフィットは何か。それを具体化するためのスキームをどのように固めて、高次化していくのか。

そのマーケティング・プロセスにおいて、重要な検証要素が土地の記憶である。現在の姿をもたらした過去の分析である。例えば、昭和30年までの新婚旅行を別府で過ごした多くの高年層にとって、別府は過去帳入りしたままだろうか？ 修学旅行ではじめて降り立った別府の港から視界に飛び込んできたのは、お土産センターの乱暴な看板類だっただろうか？

現状が望むべく姿でないとするれば、過去のどこかでミスが起きている。それは放置されずに解消されているかのチェックも必要だろう。（その具体化・政策展開は、新時代の別府創造の活動に取り組む地元のY君、実は高校の同期だったことがこの取材で初めて知ることができた。今後の活動に期待したい）

「聴潮閣」の佇まいで感じられるゆとりやリラクゼーション、最近はスローライフとも言うのだろうが、やはり別府は歩く（ける）町に戻るべきである。国道10号をバイパスするのは産業車両に任せよう。ハンデを問わず誰もが歩くことで発見（活性）と感動（癒し）を楽しめる都市。それは、モダンで未来的な空間よりも、この「聴潮閣高橋記念館」が記憶する木と漆喰の香りによって倍加するのである。

（取材：2004年7月）

はじめに